

あとがき

「希望の象徴」としての学校

この原稿を書いているのは、東日本大震災から2か月以上が経った5月19日です。新聞を開くと、原発事故を含め、震災関連の記事がまだ紙面の半分程度を占めているようです。

震災関連の記事を読む中で、1つ気づいたことがあります。それは、子どもや学校に関する話題がとても多いのです。おそらく、子どもや学校のニュースが載らない日は無いと言ってよいくらいだと思います。今日付の朝日新聞朝刊にも、「やっと高校生活」という見出しのもと、「『計画的避難区域』に指定された福島県飯館村の県立相馬農業高校飯館校の始業式と新入生歓迎会が18日、移転先の県教育センター（福島市）の体育館であった」との記事が、写真付きで掲載されていました。

毎日、「子どもや学校の話が多いなあ」とぼんやり感じてはいましたが、ある時ふと、その理由に思い当たりました。津波や原発被害によって被災者をはじめ国民全体が絶望と悲嘆に暮れる中、子どもや学校は、社会全体にとって「希望の象徴」ではないかということです。「子どもたちが〇〇で遊んだ」「学校が再開した」などのニュースは、その事実だけでなく、私たちに未来への希望を伝えているのです。

私はそのことに気づいたとき、社会の中での学校の役割の大きさに改めて思い至るとともに、教員養成という重要な立場で学校教育に携わる者としての責任の重さに身が引き締まる思いがいたしました。

学校ボランティアへの期待

今回の震災関連の報道の中でもう一つ特徴的なのは、ボランティアに関する記事が多いことです。

ボランティア活動が社会的に注目されるようになったのは、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災であると言われ、この年は「ボランティア元年」とも呼ばれています。そして、今回の震災でも、実に多くの方が被災地で、あるいは避難所で、ボランティア活動に携わっています。また、世論調査によると、実に35%もの人が、「震災支援のためにボランティア活動を行いたい」と述べています（読売新聞、2011年4月電話全国世論調査）。もはや、災害時にボランティア活動を行うことは、日本人にとってごく自然な出来事になったようです。

しかし、ボランティア活動を行いたいすべての人が被災地に行けるわけではありません。「被災地には行けないが、何かしら役に立ちたい……」という思いを持つ人が少なくないはずです。

私はそのような人にこそ、ぜひ学校ボランティアになっていただきたいと思います。希望の象徴である学校で、未来を担う子どもたちや教職員のサポートをすることは、復興に向けて未来への希望を紡ぐという、今のわが国にとってとてつもなく大きな役割を果たすことになるのです。

学校は、皆さんの力を必要としています。

終わりに

本書は、2009年度の文教大学学長調整金によって発行された35ページの
小冊子、『学校ボランティアミニハンドブック』が刊行のきっかけになって
います。それをたまたま目にされたほんの森出版の兼弘陽子さんの勧め
で、大幅に項目を増やし、教育実習生や新任の先生方にもお読みいただく
ことを想定して書き改めました。

本書が、さまざまな立場で学校にかかわる多くの方の目に止まることを
願っています。

会沢 信彦